

音楽的行動の発見を導くモノと行為 —1歳児を対象にした音楽レッスンの事例観察から—

日本音楽教育学会第44回大会
2013年10月12日
山崎寛恵・森内秀夫

1. 目的

本研究は、音楽教室で実施されている1歳児を対象にしたレッスンの観察を通して、音楽的行動の発達の契機および発達初期における音楽レッスンの効果について検討することである。特に本研究では、レッスンで使用される様々な教具とそれらをめぐる乳児の振る舞い、そして講師や保護者からの働きかけに対する子どもの応答などを記述し、「音—人—モノ—場所」のダイナミックな関係から音楽的行動の萌芽を見出すことを目的とする。

2. レッソンの概要

1歳児クラスのレッスンでは、通常、講師によるピアノやエレクトーンを生演奏を鑑賞する、歌唱曲を楽しむというプログラムの後に、親子で一緒に音で遊ぶ時間が設けられている。この時間は、コンパクト・グロッケンやタマゴ型マラカスなどの「楽器を用いる時間」、音楽に合わせて「身体を動かす時間」、カラーロープやカラーシートなどの「グッズを用いる時間」で構成されている。

3. 分析の視点と観察

本研究で特に着目したのは、「グッズを用いる時間」におけるカラーロープ(赤いひも)を使用した実践である。いうまでもなくカラーロープは楽器としての特徴を欠いており、それ自体で“楽音”を出すことはできない。したがって、この時間は、音楽的要素が明白でないグッズによって「音楽に合わせて皆で動く楽しさを体験する」というレッスン内容になっている。楽器に直接触れたり、生演奏を鑑賞したりする時間ならば、音楽的行動の直接的な基盤を導入するレッスン内容であることは明らかだろう。しかし、ロープのように楽器的な特徴の低いと思われるグッズを用いて体験されることの“音楽的な意味”とは一体どのようなことだろうか。そこで筆者らが関心を向けたのは、カラーロープの物理的な特徴とそこに内在する行為の可能性である。ロープには変形するという性質があり、持ち手の様々な動きがその変形の様子に現れる。つまり、ロープの挙動を見ればその操作者の動作を知覚し、共有することができる。レッスンでは講師、保護者、乳児がカラーロープを一緒に持ち、それを音楽に合わせて動かす。こうした実践がロープの持つ物理的な特徴と結び付き、一人の行為では体験できない共同的な音楽・リズム体験がもたらされているのである。またロープをめぐる行為には、大人と子どもの間に顕著な特徴がみられた。大人は、そのロープに楽器としての明示的な特徴がないにも関わらず、音楽が流れるとそれに合わせてひもを動かす傾向があり、音楽的な制約下では、ロープがあたかも楽器のように扱えるかのような行動を示した。一方、観察初期の子どものロープの操作には、大人のような音楽的制約の影響がほとんど見られず、レッスンを繰り返して、大人や他の子どもたちと共同して音楽とロープの動きをすり合わせていく経験を通して、少しずつ「音楽的な可能性」を発見していく様相が観察された。

本研究は、こうした実践がレッスンとして成立している事実をもとに、音楽的な特徴が一見不明瞭であるようなモノとのかかわりが音楽的行動の発達に寄与している可能性を議論し、行為のレベルから始まる音楽教育の意義を検証していく。